令和７年(2025 年) ２月７日（金）
公益財団法人広島平和文化センター
国立広島原爆死没者追悼平和祈念館　副館長：上村
電話：543－6271
担当：橋本

栗原貞子の代表作「生ましめんかな」に登場する人物のモデルとなった 平野 美貴子さん 及び 小嶋 和子さんの被爆体験記と 助産師 三好 ウメヨさんの遺影が登録されました

1966 年８月、新聞の取材により、原爆詩「生ましめんかな」に描かれている母子が判明しました。続く 1967 年に週刊誌が、お産に立ち会った助産師が生存していたことを報道し、3 人は 22 年ぶりの再会を果たしたのです。

今回は、助産師 三好ウメヨさんのご遺影と、彼女が暗闇の地下室という究極の状況下で取り上げた小嶋和子さんとその母 平野美貴子さんの体験記を追悼平和祈念館にご登録いただきました。

１　小嶋和子と三好ウメヨの被爆状況

８月６日、被爆の瞬間、助産師の三好ウメヨは、勤労動員のため宝町と鶴見町の境（爆心から約 1.3ｋｍ）にいました。ウメヨは、熱線を受け背中と腕に大やけどを負ったにもかかわらず、娘（当時 12 歳）の安否をたずね比治山高等女学校へと向かいました。しかしその後、必死の思いで大河国民学校にたどり着き二日間治療を受けた後、夫の勤務先である広島貯金局（爆心から約 1.6ｋｍ）の地下室へと移りました。

平野美貴子は被爆の瞬間を東千田町の自宅（爆心から約 1.7ｋｍ）でむかえました。三女と一緒に川べりの土手に避難していると、ほどなくして大やけどを負った佐藤冨士子（美貴子の姉）が勤務先の電話局から戻ってきました。そこでふた晩野宿した後、８月８日に美貴子の夫の勤務先である貯金局の地下へと避難しました。

貯金局の地下室は、40 名ほどの被災者でひしめき合っていました。当日夜 12 時頃、美貴子が産気づくと、高熱で意識もほとんどない状態だったウメヨが、起きだしてきて、「私は産婆です。」と名乗り出て、元気な赤子をとり上げました。そしてその子は、和子と名付けられました。

このエピソードが後に広島の原爆詩人、栗原貞子に伝わり、代表作「生ましめんかな」が誕生しました。

２　体験記

⑴　小嶋和子「運命を胸に抱いて」（書下ろし）　（登録 2025 年１月）

⑵　平野美貴子「三十年の歩み」
広島県扇の会編『扇 扇の会創立 20 周年記念号』1975 年４月第４号より　（登録 2024 年 11 月）

※体験記は両編とも追悼平和祈念館のサイト「平和情報ネットワーク」でお読みいただけます。

３　遺影の提供者（敬称略）

三好ウメヨ：三好智史（ともふみ）（ウメヨの孫）

※小嶋和子氏及び三好智史氏への取材は可能です。

４　遺影の提供について

登録された遺影をデータ（ＪＰＧ）にて提供できます。

提供者：国立広島原爆死没者追悼平和祈念館

「生ましめんかな」に関連する人々

ひらの とみお
平野 富夫
（1906 - 1974）

美貴子の夫。広島貯金支局で被爆し、似島へ運ばれ、1 カ月後に帰宅。

遺影登録：
2021 年 4 月 12 日

ひらの　みきこ
平野 美貴子
（1909 - 1981）

東千田町の自宅で被爆。8 月 8 日に広島貯金支局の地下室に避難し、四女和子を出産。

遺影登録：2021 年 4 月 12 日

みよし　うめよ
三好 ウメヨ
（1906 - 1971）

助産師。爆心から約 1.3 ㎞の勤労動員先で被爆。8 月 8 日に広島貯金支局の地下室に避難し、平野美貴子の出産に立ち会う。

遺影登録：2025 年 1 月 27 日

ひらの れいこ
平野 玲子
（？ - 1945）

美貴子の長女。
市立第一高等女学校 1 年生の時に勤労動員先で被爆し、還らぬ人となった。

遺影登録：
2001 年 11 月 5 日

こじま かずこ
小嶋 和子
（1945 -　）

自らも重傷を負っていた三好ウメヨによって無事取り上げられ、現在に至る。

撮影：1963 年 8 月 6 日

さとう　ふじこ
佐藤 冨士子
（1906 - 1982）

美貴子の姉。広島中央電話局で被爆。戦後、職場で同僚に話した妹の出産エピソードを栗原貞子が耳にし、「生ましめんかな」が制作された。

遺影登録：
2024 年 12 月 17 日

運命を胸に抱いて

こじま　かずこ
小嶋　和子

納得ができないまま使命や定めを背負うことほど、辛(つら)いことはない。

原爆詩人、栗原貞子(くりはらさだこ)の代表作「生ましめんかな」。自分がその赤子のモデルだということを、私は十代の半ばで初めて知った。誕生にまつわる悲惨なエピソードを幼い時分には知らせたくないと配慮した母が、私の成長を待って教えてくれたのだった。それから５年ほど経(た)った１９６６（昭和４１）年８月、新聞に「原爆詩“生ましめんかな”－広島の主人公母子わかる」と題した記事が掲載されると、テレビや週刊誌もこぞって取り上げ、以降、毎年８月の式典が近づく季節になると、頻繁に取材を受けるようになった。中学生になって初めて平和記念資料館へ行ったほど、原爆の知識も十分でない私は、「平和の使者」として祭り上げられることに当惑するしかなかった。

１９４５年８月６日、当時、我が家には、父・母と長女、三女、そして伯母（母の姉）の５人が暮らしていた。

１９４５年８月６日も、私の母、平野美貴子(ひらのみきこ)（当時３６歳）は、自宅近くの広島貯金支局（以下、貯金局と記す）へ出勤する夫の富夫(とみお)（当時３８歳）をいつものように送り出した。

高等女学校１年生の長女、玲子(れいこ)（当時１２歳）は建物疎開(たてものそかい)へ、母の姉で、広島中央電話局の電話交換手をしていた佐藤富士子(さとうふじこ)（当時３９歳）も元気に出かけていった。

皆を見送った後、美貴子は２階の物干し場で洗濯物を干し、三女の美子(よしこ)（当時３歳）は隣の部屋で遊んでいた。実はこの日、美貴子は私の出産の予定日をむかえていた。

８時１５分、１階の台所から煮豆がふきこぼれる匂いがしてきた。美子と一段落していた美貴子が急いで１階へ続く階段を駆け下りようとしたその瞬間、轟音と共に階段の真下に作ってあった防空壕へと突き落とされた。２階からの悲鳴でやっと我にかえり、駆け上がると美子が仰向けになって「目が見えないよう」と叫んでいた。

当時住んでいた東千田町（現広島市中区東千田町一丁目４辺り）は爆心から約１．７キロ。家の倒壊は免れることができたものの、部屋の窓ガラスは爆風で粉々に砕け、壁土が畳一面に積もっていた。幸い美子は目に壁土の埃が入っただけで無事で、二人で京橋川の西岸の土手へ逃げることができた。家はその後、急速に押し寄せてきた火事で焼け落ちた。

貯金局で重傷を負った父は、貯金局の緊急の場合の避難所として指定されていた御幸橋で陸軍のトラックに乗せられ、救護所となった似島へと船で連れて行かれた。

爆心地から５００メートルしか離れていない場所で建物疎開の作業をしていた姉の玲子は、遺骨すら見つけ出すことができなかった。玲子が通っていた広島市立第一高等女学校（通称、市女）の１・２年生のほとんどは建物疎開に駆り出され、生徒６６６名全員が亡くなっていた。

川べりの土手にいると、ほどなくして美貴子の姉、佐藤冨士子が大やけどを負いながら這うようにして電話局から戻ってきた。冨士子の状態は、日赤病院の医者に「死ぬに決まっている患者に貴重な薬はやれない」と言われたほどだった。

川べりでふた晩野宿した後、美貴子の夫の部下が迎えに来てくれ、避難所となっていた貯金局の地下へ８月８日に移った。そこは３０畳ほど畳が敷かれていて４０人近くの負傷者が収容されていた。

夜も０時に近づいた頃、美貴子が産気づいた。すると部屋の奥にいた女性が「私は産婆（さんば）です」と声をかけてくれた。自身も背中と腕に大やけどを負い、高熱で意識がなかったほど重傷だったその助産師が、力を振り絞って（私を）「生ましめんかな」と立ち上がった瞬間だった。

比較的元気だった女性たちが湯を沸かし、男性たちは焼け跡からなんとかタライを探し出してきた。ロウソクの灯（あか）りすらない暗闇の中、元気な産声（うぶごえ）と共に私は生まれた。

その時の状況を美貴子が短歌に残している。

点眼の薬さへなく　生湯（うぶゆ）なく
　　みつむる吾（われ）の　胸うつろなり
赤くはれし乳首求めて　みどりごは
　　あはれ泣けども　乳ひとしずく出ず

歌集廣島編集委員会編『歌集 廣島』1954 年

建物疎開中に亡くなった姉の玲子が、「もしこんどの赤ちゃんが女だったら、必ず和子（かずこ）と名付けてね」と口ぐせのように言っていたことから、私は「和子」と命名された。

てっきり亡くなったと皆が思っていた私の父は、1 カ月ほどして無事帰宅してきた。私が生まれたことを知るや、焼け跡に出来ていた市役所の仮出張所に出生届を出したそうだ。

母の出産を助けた助産師の所在は父が探しても分からず仕舞いだったが、その後の週刊誌の取材で、三好（みよし）ウメヨ（当時３９歳）さんであ

ることが判明し、誌上での対面が実現した。被爆(ひばく)から２２年経った１９６７年のことである。これを機に、新聞やテレビの取材が殺到するようになり、時には配慮に欠ける質問を受けたり、覚えのない発言を記事にされたりすることもあって、私はいつしか詩のモデルであることから目を背けるようになった。

栗原貞子の「生ましめんかな」では、“あかつきを待たず産婆は、血まみれのまま死んだ”とある。実は、伯母の冨士子が勤務先の電話局で、私が生まれた経緯(けいい)を同僚に話したところ、その人が帰宅後にご近所の方に話しているところを、たまたま栗原貞子が聞きつけ、インスピレーションを得て作った詩なのだそうだ。事実と異なることもあって、「自分でありながら、それは自分ではない」。その感覚が常につきまとった。教科書にも掲載され、多くの外国語へも翻訳されたその偉大な詩の重さに耐えかね、私は栗原貞子の作品に目を通すこともしなくなった。

私は一度、体調を崩し入院している栗原を見舞ったことがある。その際、自分が大した平和活動も出来ていないと告げると、「あなたは元気で生きていることが、一番なのだから」と励まされた。

それから程なくして、原爆投下から６０年の２００５年、栗原貞子が亡くなった。「生ましめんかな」に込めた栗原の思いを尋ねることもしなかった自分だったが、長女の眞理子(まりこ)さんから聞く機会があり、その時から私の中で何かが変わった。

「死んだ産婆は“ヒロシマ”。被爆死した多くの人たちを表している。生まれた赤ちゃんは“（未来の）広島”なのだ。私たちは、この“広島”を育てて、世界中にもう再び“ヒロシマ”が起きることがな

いようにしなければならない」と栗原が生前語っていたことを眞理子さんから教えられ、彼女が純粋に平和への希望を表現していると感じ取ることができた。その瞬間、詩のモデルであることの重圧から解き放たれ、わだかまりも消えたような気がした。

三好ウメヨさんは１９７１年（享年６５歳)、母の美貴子は１９８１年（享年７２歳)、栗原貞子さんは２００５年（享年９２歳）に亡くなった。大切な三人の母親を亡くした今、私は、求められれば、栗原さんが詩に込めた平和の願いを多くの人に伝えていこうと思っている。彼女が言ったように「一度目はあやまちでも、二度目は裏切りだ」といった事態に世界が陥(おちい)らないよう、自分なりに静かに、微力(びりょく)だとしても平和につながる活動を続けていきたいと思っている。運命を胸に抱きながら。

三十年の歩み

五回　平野美貴子

本年は、私達扇の会発足二十周年、広島にとっては特に忘れ得ない被爆三十周年、そして一九七二年国連総会において定められた「国際婦人年」にもあたっております。

私の末娘は三十年前の原爆投下の二日後、全市がほとんど焼けただれて何もない無惨な地獄図絵そのままの廃虚の中、千田町貯金局の地下室の板間の上で、皆様の暖かい御協力のおかげで産声をあげました。栗原貞子さんの詩「生ましめんかな」の中に出てくる赤坊がそれです。

長女は市立第一高女一年生で学徒動員されていて、哀れにも爆心地中央だったため、全員即死、わずかに生き残った者もお互いに手をとりあい元安川の河畔にたどりつき、死を覚悟してか「君が代」を歌い、若い命は流され消えていったそうです。月丘夢路主演の映画「ひろしま」はその当時をよく映し出しています。これは事実の映画です。

長女は生前「もしこんどの赤ちゃんが女だったら必ず「和子」と名づけてね」と口ぐせに申していました。姉の悲しい遺言となって生れ出た「和子」は現在とても元気です。

点眼の薬さえなく生湯なく
　みつめる吾の胸うつろなり　八月八日
赤くはれし乳首求めてみどりごは
　あわれ泣けども　乳ひとしずく出ず
斑点の出でそめし姉と泣く吾子に
　うすき重湯を　半半にあたう
ポロポロと脱けそめし姉の頭髪を
　そっとかくして　涙拭うも
誰に訴え　誰に叫ばんこの怒り
　せつなきままに　あてどなく行く

以上の拙作は当時私が作っていたものを、昭和二十九年歌集「広島」にのせたものです。

ありあまる今の豊富な食糧事情になれておられる現代の人達には想像もできないほどの戦後の食生活の中で、母乳の出ない乳呑子を抱いて生きることがどんなに大変であったか……一面互礫と化した土地を、何日もかかって堀りおこし堀りおこし私達は必死で野菜を作ったものです。全焼して何一つない子供達の学校舎復興のために勤労奉仕、募金と、保護者が一丸となって立ち上ったものです。

ＰＴＡが生れ、役員に選出されると、母親達の和と教養向上、自分を含めて実力養成するために勉強もしました。そして気づいたことは地域において先ず自分達の住む社会を変えて、お母さんが手を握りあってゆかなければ子供達の幸福は生れないという確信でした。

たまたま町内に進歩的な人がおられて町内会に婦人部が設置されました。然し上に立つ人は男性で、会合に出ても、男子の前で堂々と発言でき、その反論に対して答えのできる女

性は少数でした。昭和二十五年より同じ町内の有志で読書グループをもち、その自覚した会員さん達と共に、町内で女性の手による育成会を組織しました。子供のある人ない人、ほとんどの町民の方が会員となってくださいました。ひまのある人は手を、御忙しい人は頭を、何もないと言われる方はせめて財政上の援助でもと私達は一生懸命でした。

私は役員の皆様にいつも言っておりました「一つの事業を成功させようと思えば、苦しいことに耐えてゆく捨石の時代が必ずあります。子供達の幸福のためにどうぞ一緒にがんばってください」と……。

小学校と中学校と両方の役員をしていた関係で都合よく、小中合同の地域別懇談会の開催を提唱して成功させました。

経済状態も不安定だったので、合同で内職の斡旋もしました。町内会長の土地を提供してもらって公民館を建てることにも成功しました。これには男女を問わず全町民賛同して協力してくださいましたが、こうした影にはお母さん方の平素の奉仕的な数々の業績の積み重ねがあったればこそです。

児童図書館、浅野図書館より図書の貸出を受けたのも私達の町が市内で一番でした。

母さん方のつどいは市内で最高と、市より表彰も受けました。そうなると町内の方よりも亦一段と協力を受けられるようになりました。然しそこまで辿りつくには「出るくいは打たれる」で様々な抵抗がありました。誤解による非難中傷、然し私は負けませんでした。

まだ年令的に若かったせいだと思います。

二十二年十月、原爆を受けているために危篤状態となり、危く命を落とすところでした。助からぬ命が助かったのだからと、私は人が笑うほど社会奉仕に全力を傾けました。勿論、家族の理解があったからです。

子供会が設立され、小二より中三までの希望者に時間別指導で、珠算の上手な良人は勤務が終ると、無報酬でその指導を引き受けてくれました。その良人も昨年二月亡くなってしまいました。私が皆の御協力の賜で築いた前の町内の方から（現在の町に引越してから十年になります）貴女がそのもとを築いてくださったおかげで私達の町内はいろいろな面で数々の指定を受け、そして優良町内会として表彰を受けました。昔を知っている人は今でも感謝しています。と、お世辞にせよ、その言葉に私は感泣しました。

世は移り変ります。住む人もまた新しく変っていくでしょう。私の生活も変化してきました。

先日、樋口恵子先生の講演をきいて、新らしいことの改革に必要なものは、実力養成、悪評に耐える力と主体性を確立した者同志の連帯感と、実行する勇気……これは今も昔も変らぬ大事な要点だなと感じたことです。

住所　広島市旭二丁目